

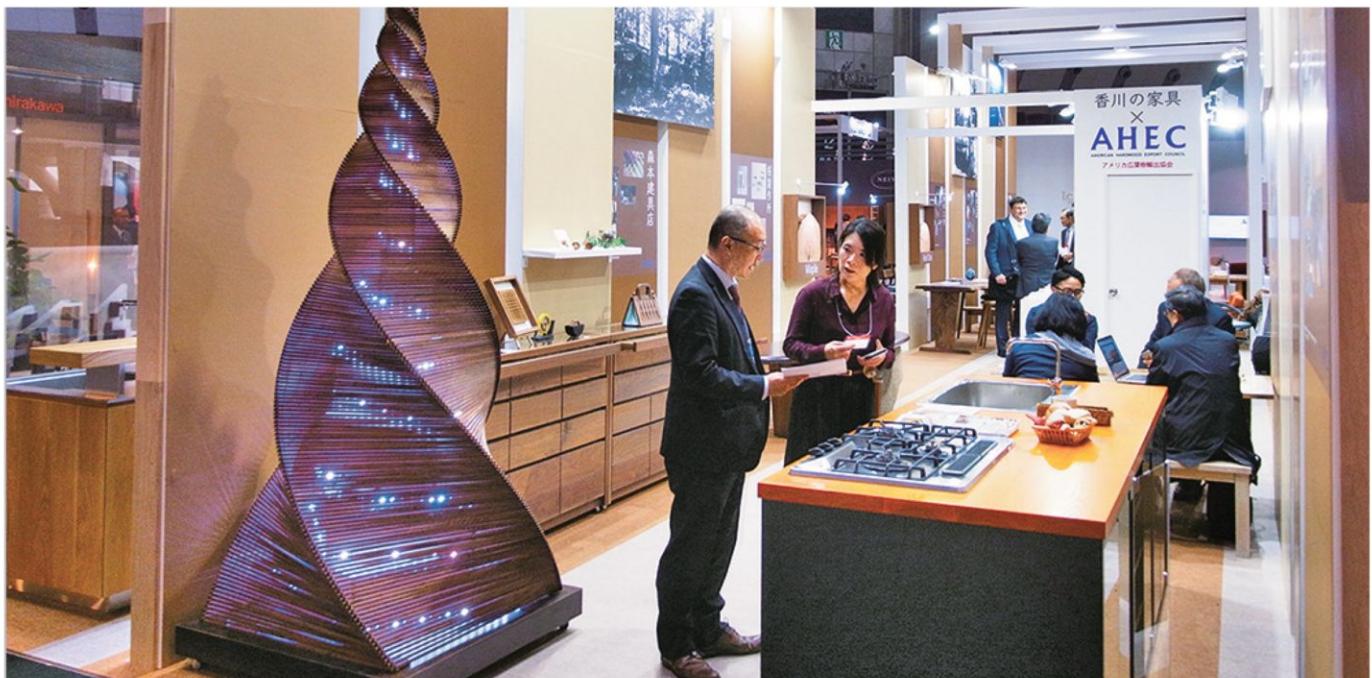


# US HARDWOOD INFORMATION No.31

April, 2017

American  
Hardwood  
Export  
Council  
(AHEC)

c/o American Consulate General 2-11-5 Nishitenma, Kita-ku, Osaka, 530-0047, Japan



特集 都市型大型建築物こそまだ木材を活用できる  
ミラノサローネでも注目、「突板の反撃」始まる

金米広葉  
主席等級



# IFFT interiorlifestyle Living in Tokyo 2016

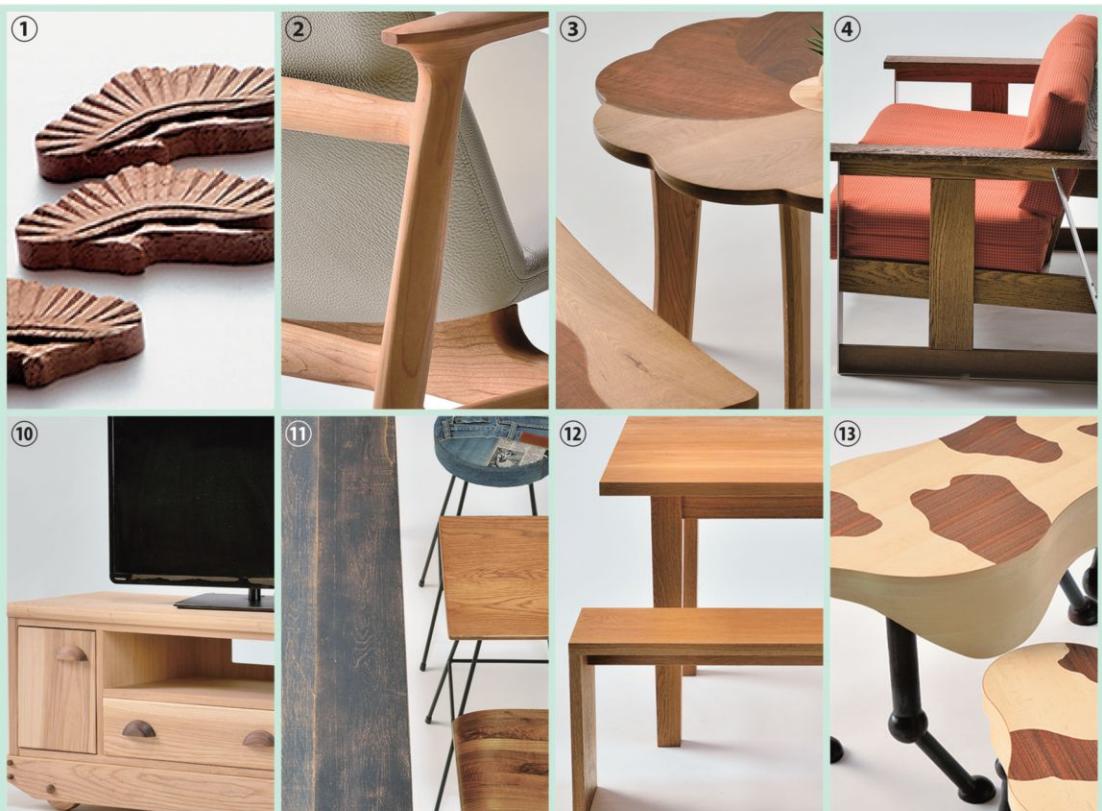
## 再生を目指す香川県の家具業界とコラボ 「アメリカ広葉樹 家具プロジェクト in 香川」



### 参加の 18 社と作品

左上から右下へ (50 音順)

- ①朝倉彫刻店
- ②井上製作所
- ③有限会社 春日工芸
- ④株式会社 カトミ
- ⑤有限会社 川西木工所
- ⑥有限会社 木下商店
- ⑦有限会社 光松庵
- ⑧株式会社 桜製作所
- ⑨すぎやま家具
- ⑩有限会社 ナカヤ
- ⑪日美 株式会社
- ⑫番町工房
- ⑬有限会社 藤田木工所
- ⑭有限会社 槟塚鉄工所
- ⑮株式会社 マルトク
- ⑯株式会社 垣創社
- ⑰株式会社 森繁
- ⑱有限会社 森本建具店



11月7日(月)～11月9日(水)の3日間、東京・有明の東京ビッグサイトでIFFT interiorlifestyle living 2016が開催されました。今年のアメリカ広葉樹輸出協会(AHEC)のテーマは、「アメリカ広葉樹家具プロジェクトin香川」。家具産地として再生を目指す香川県の家具・木工メーカー18社と2016年1月から進めてきたコラボレーションによるプロジェクトです。

香川県は家具産地だったかと思う人もいるかもしれません、家具づくりの歴史は古く、江戸時代に初代高松藩主の松平頼重が漆芸を奨励したことに始まります。漆の技法の発祥の地であった香川県が当時手がけていた漆器は食器や盆のような小物ではなく、座敷机や飾り棚などの大きな和家具であったため必然的に漆を塗るベースとなる木地としての和家具づくりも発展したのです。

そして高度成長期以降、香川県は、座敷机と家具調こたつの生産量で日本一になっています。

従来の座敷机は天板と脚が一体だったため、かさが高く配送コストがネックでしたが、取り外しできる脚を考案することにより、地場産業だった座敷机は全国区へと大きく飛躍し、生産量も日本一になりましたが、日本人の生活様式の洋風化の進行で、住宅から和室が姿を消すにつれ、座敷机の生産量は減少の一途をたどりました。それではと座敷机にヒーターを付けるという手法で家具調こたつを生み出すと、日本のシェアの8、9割を生産、再び日本一となったのです。しかし商社が生産コストの安い海外に生産を移したことにより、多くのメーカーが倒産、現在残っているのは数社という状況にまで落ち込んでしまったのです。日本一の座から二度に渡る存亡の危機を乗り



越えて来た香川県にはまだ優れた技術を持つ家具や建具職人などが多く、今も優れた家具を生産しています。ただ華々しい表舞台から一旦姿を消したことにより、家具産地としての知名度が後退したことも事実です。

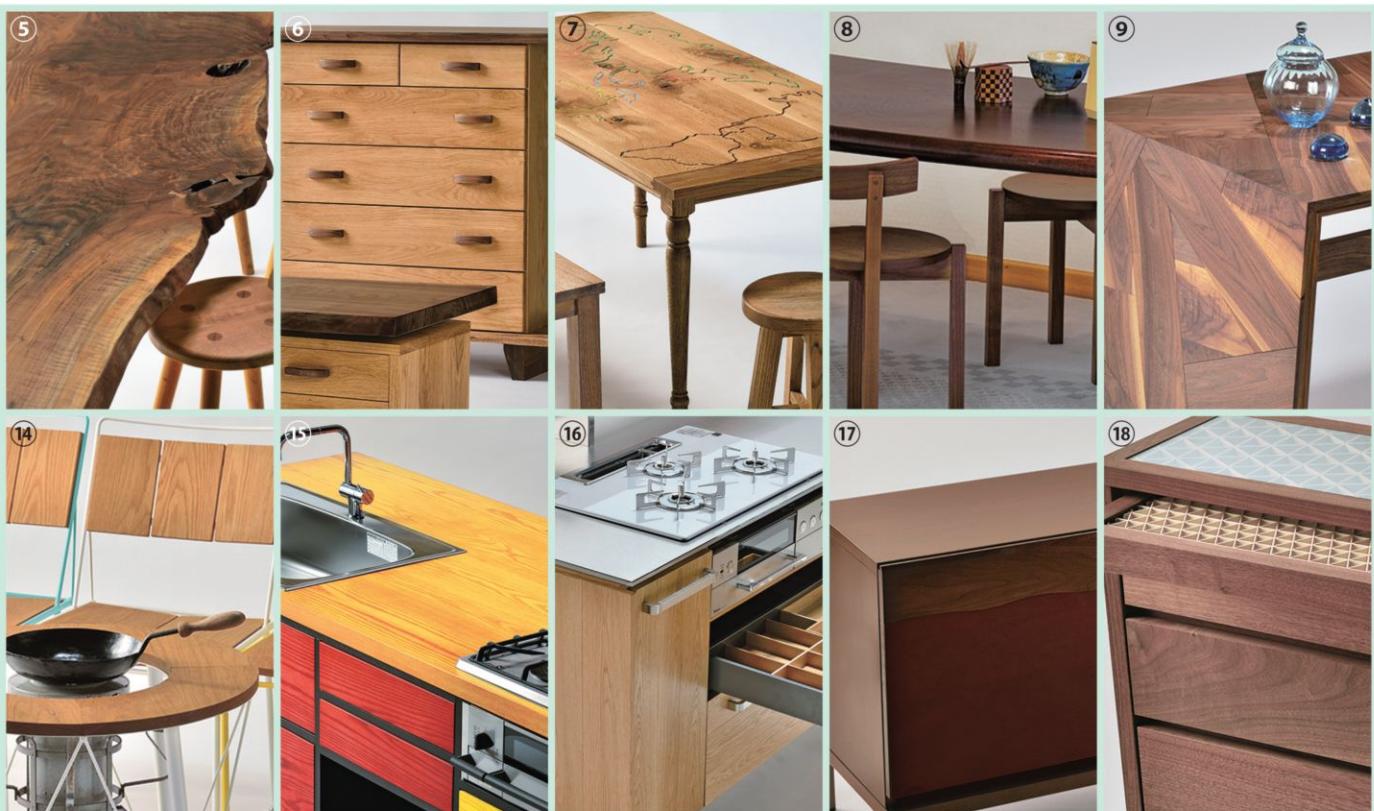
今回のプロジェクトでは、香川県の家具産業の再生を願う18社を、公益財団法人である「香川県よろず支援拠点」がまとめ役となり、総数50点にも及ぶアメリカ広葉樹を用いた家具や木工作品が作成されました。8月後半には高松市内でパンフレット用にこれらの作品の撮影が行われました。

作品は、箸置きや木製リングなどの小物から2mを越えるキッチン、ヴィンテージ加工されたカフェテーブル、鉄やアルミと組み合わせたカウンターやテーブル、普段は針葉樹で作る組手の技法を取り入れたチェストやモニュメント、地元の庵治石をテーブルの脚に使用した立札ダイニングテー

ブルなど多岐にわたり、アメリカ広葉樹の魅力を様々な形で表現した家具が香川県の風景パネルと共に12小間のブースに所狭しと展示されました。来場者の関心も高く、製作者と気軽に声を交わしながら実際に座ったり触れたりするなど、展示意図もうまく伝わり好評を博しました。3日間の会期中の来場者数は20,217名でした。

ブース内で配布されたパンフレット「アメリカ広葉樹家具プロジェクトin香川」には、アメリカ広葉樹の樹種や環境、出展作品だけでなく、有志による座談会を、「香川県の家具：栄光と挫折、そして次なる挑戦へ」として掲載しており、興味深い内容となっています。

パンフレットをご希望の方は当協会ホームページ(<http://www.ahec-japan.org>)の資料請求ページからお申込みください。無料です。



# アメリカ広葉樹セミナー「暮らしのデザインを考える」 家具産地の広島県府中市で初開催



2016年6月29日、広島県府中市でのセミナー風景



アメリカ広葉樹輸出協会(AHEC)は、6月29日(水)「アメリカ広葉樹セミナー」を日本の家具産地のひとつ広島県府中市にて開催しました。広島県でのセミナーの開催は2000年の広島市での開催以来16年振り、府中市では初めての開催となりました。

当日はあいにくの雨でしたが会場の府中商工会議所の2階会議室には、130人を超える家具・木工メーカー、木材業界関係者、建築関係者の皆さんにご参加いただきました。しかも府中市内だけでなく、山口県、香川県、

遠くは高知県からもご参加いただきました。

講師は、府中の家具メーカーとも関係のある家具デザイナーの小泉誠氏。今回は「kitokiの誠実な素材活用」のテーマで同氏が手掛ける日本各地のプロジェクトの内容やコンセプト、使用する素材の話などを中心に、日本の家具の歴史からデザインに関する考え方などについてお話しいただきました。

さらに今回が初来日のパデュー大学准教授のエバ・ハビアロバ氏は、家具の強度設計、持続可能な木製品開発、貧困層のための

低コスト家具のデザインと開発、国際的な持続可能性の分野における第一人者です。同氏からは、「キッチンキャビネットと家具の素材としてのアメリカ広葉樹のトレンド」と題して講演いただきました。キッチンキャビネットやデザイン面の枠に留まらず世界の家具業界の動向など、研究やリサーチの結果を含めて多岐に渡る講演でした。

そして、スペサート氏の講演では、アメリカ広葉樹の材質が、どのように格付けされ、何を欠点とするのか、欠点とグレードの関係性など、米国では12週間の研修で学ぶ内容を分かりやすく説明いただきました。

最後に木材塗装研究会の長澤良一氏より、木材の特徴によって使い分ける塗料や塗装の技術面について塗装サンプルを使って説明いただきました。

今回のセミナーでは、府中市、府中家具工業協同組合、府中商工会議所、広島県天然木化粧合板工業協同組合に後援をいただき、レセプションには府中市長にもお越しいただき、「府中はモノづくりの街なので、このセミナーの成果を踏まえ、広葉樹を取り入れた家具業界のますますの活性化に大いに期待します」とのご挨拶をいただきました。

## セミナー講師のプロフィール

### 府中会場



小泉 誠  
Makoto  
Koizumi  
家具デザイナー

1960年東京生まれ。木工技術を習得後、デザイナー原兆英と原成光に師事。1990年Koizumi Studio設立。2003年にはデザインを伝える場として「こいずみ道具店」を開設。建築から着置きまで生活に関わる全てのデザインを手がけ、現在は日本全国のものづくりの現場を駆け回り地域との協働を続けています。2005年より武蔵野美術大学空間演出デザイン学科教授。2012毎日デザイン賞、2015日本クラフト展大賞受賞。<http://www.koizumi-studio.jp>



長澤 良一  
Ryoichi Nagasawa  
木材塗装研究会  
運営委員

1946年川崎市生まれの東京育ち。1968年芝浦工業大学工業化学科卒業。ユニオンペイント株式会社入社、取締役技術部長。1999年よりキャピタルペイント株式会社東京営業所長。この間、木材塗装研究会(色材協会および日本木材加工技術協会の内部組織)運営委員。木材塗装の普及、啓蒙に努める。木工塗装一級技能士、埼玉県技術アドバイザー、東京都テクニカルアドバイザー、木工塗装中央技能検定委員。

### 府中・札幌会場



Eva Haviarova  
Ph.D.  
エバ・ハビアロバ  
パデュー大学准教授

1992年スロバキアのズボレン工業大学で木材加工と家具デザインで理学修士号取得。米国パデュー大学で家具の設計制作で博士号取得。パデュー大学林産学部准教授。専門は木製品工学と家具の強度設計。パデュー大学森林研究所所長。家具の強度設計、持続可能な木製品開発、貧困層のための低コスト家具のデザインと開発、国際的な持続可能性の分野における第一人者。教育と研究以外に学外での支援活動では林産業界と協働。

# アメリカ広葉樹セミナー 「空間の質を考える」 札幌で8年振りの開催



アメリカ広葉樹輸出協会(AHEC)は、7月1日(金)「アメリカ広葉樹セミナー」を札幌にて開催しました。6月29日の広島県府中市に引き続き、100人を超える建築家、デザイナー、家具メーカー、木材業界関係者などにご参加いただき大変盛況に終わりました。札幌では2008年以来8年ぶりのセミナーの開催となりました。

セミナーのテーマは「空間の質を考える」。北海道広葉樹協議会会長、高橋秀樹氏からの開催挨拶後、米国側から全米広葉樹製材協会主任等級検査官のデイナ・スペサート氏に

よるアメリカ広葉樹製材の等級格付けについて、またパデュー大学准教授のエバ・ハビアロバ氏より「キッチンキャビネットの家具の素材としてのアメリカ広葉樹のトレンド」と題し、デザインのみならず、幅広いリサーチや研究結果のデータを加えてご説明いただきました。

日本側からは家具工房 santaro の高橋三太郎氏から「建築空間と家具」と題してお話し頂きました。壊れたら直して使う、素材の持続可能性だけではなく、家具の持続可能性も木工家として提供することが大事とい



うのが氏の持論で、空間にマッチした作品をスライドでご説明いただきました。

最後に「木材の復権」のテーマで、(株)日建設計の常務執行役員設計部門副統括の山梨知彦氏より、都市の大型建築での木材活用法について東京都江東区新木場の「木材会館」での実例に基づいてお話しいただきました。実際の木材の活用方法については次頁で詳しく紹介しています。山梨氏によれば、日本人の木材好きはDNAに刻まれているのではなく、子供の頃に木材の建築に住み、木材の香りを嗅ぎ、そして割り箸を使って食事をして育っているからであり、木材の復権は多くの日本人が木材好きという魂を持っている間にやらないと取り戻しがつかない。だから現代の建築家が都市建築に木材を用いなければ、今後そんなことを考える人間はないわけで、木材の復権は今やらなければいけないことを熱く語られました。

レセプションでは、在札幌米国総領事館首席領事の JoEllen Gorg 氏の挨拶後、セミナー参加者のほとんどが出席し、講師の方々とも積極的に意見を交換されました。

## 札幌会場

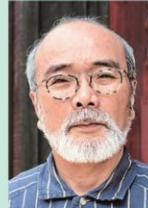


Dana Spessert  
デイナ・スペサート  
全米広葉樹製材協会  
主席等級検査官



山梨 知彦  
Tomohiko  
Yamanashi  
建築家

1984年東京芸術大学建築科卒業  
1986年東京大学大学院修了  
日建設計に入社。現在、常務執行役員、  
設計部門副統括、山梨グループ代表。  
建築設計の実務を通して、環境  
建築やBIMやデジタルデザインの  
実践のほか「都市建築における木材  
の復権」も提唱  
受賞:「Mipin Asia(木材会館)」、「日  
本建築大賞(ホキ美術館)」、「日本建  
築学会作品賞(NBF大崎ビル)」、  
「BCS賞(飯田橋ファーストビル、ホ  
キ美術館、木材会館、NBF大崎ビル  
にて受賞)」ほか



高橋 三太郎  
Toshihito  
Yokouchi  
木工家

1949年名古屋生まれ。1968年北海  
道大学入学(1974年中退)  
1971~74年ヨーロッパ、イスラエル、ア  
メリカ、メキシコ遊学  
1982年家具工房 santaro 設立  
主な展覧会・受賞: 1987年六本木  
AXISにて「santaro works 展」、  
1997年銀座松屋デザインギャラリーにて「santaro 15 YEARS 15 CHAIRS」、  
2000年ストックホルムにてグループ  
展開催、「第2回暮らしの中の木の  
椅子展」優秀賞、2003年東京国立近  
代美術館工芸館「現代の木工家具 9  
人展」出品、2015年北海道立近代美  
術館「高橋三太郎展」

# 都市型大型建築物こそまだ木材を活用できる 建築家山梨知彦氏（日建設計）の講演「木材の復権」から



木材会館：設計監理・日建設計 写真：雁光舎（野田東徳）

木材には新しい都市建築を作る可能性があります。ただ無理やり使うと木が嫌な材料に見えたり、嫌われてしまいます。一番重要なキーワードは適材適所、つまり木でなければいけないところ、木であつたら素晴らしいところに使うことが最も重要です。

2009年に東京の新木場に竣工した木材会館は、最上階を除いて大きな構造は鉄とコンクリートの大型建築ですが、多量の木材を適材適所に用いた建築です。

国産材の需要低迷や都市の大型建築で全く木材が使われない状況の中で木材の需要を上げるために、大型建築の材料にどうして木材を入れるかが最大のテーマでした。二番目はここで使った木材の利用方法が他の建築でも使えること、他の建築家でも使える方法で使うこと、つまり木材の利用法の一般化でした。また木材が高級材料だと思われている状況も直さないといけない。適材適所で木を使えばもっと安くできるだろうと思ったのです。

## 「ポイントは不燃化しないで用いること」

不燃化しないメリットは、まず安いこと、木味が出ること、それから木の比重が軽く

なる、木は軽いことがメリットです。さらに不燃化すると木は加工しにくくなるので、できるだけ不燃化を最小限にとどめました。用いたのは外装二次構造部材、内装材、構造材の三ヶ所です。

## 「外装二次構造部材として使う」

大きな構造は鉄骨の方にメリットがありますが、手摺りとか間柱など木でなければ、そして木の方がメリットがある場所を丁寧に探しました。コンクリートや鉄製の大きな柱や梁と違い、手摺りや庇やルーバーなどはできれば重機で運びたくないものです。ここでは木材を1本も接着せずに長さも3メートル以内に抑えているので大工さんが1人か2人いればすべての部材が運べます。現代建築では考えられないのですが、木材を使うとたやすくできるのです。金属やコンクリートは熱を貯めますが、木材は日除けに用いても温まりません。おまけにコンクリートで足場ができた状態ですから施工も安全です。

## 「内装材として使う」

木はどうしても風雨に弱いですから内装でうまく使えないか。まずは木のスパンに

あったところ。オフィスのスパンは16mなので木造だと大変ですが、間柱なら1間(1.82m)程度、せいぜい2間ですから木で問題ありません。

## 「不燃材でない木を内装に使えるのか？」

建築基準法をよく読むと燃えてはいけない材料で作るように書いてありますが、それと同等な安全性が確保できれば使っても構わないという但し書きがあります。内装材が燃えた時の危険は煙が顔のレベルに漂って避難時に煙に巻かれることですからそれを避けねばいいのです。日本は地震国ですから天井の中に柱や梁りがあるので天井懐がたくさんあります。この物件では折り上げの照明を使っていますが、天井を落とせば非常に大きな空間が天井裏から現れます。火事の時にはそこに煙を貯めればすぐに顔のレベルまで降りてきません。実際計算してみるとこの物件では5.4m位の天井高があるので、煙が1.8mの高さまで降りるまでに相当避難時間を稼げます。そんな法律がどこにあるのかというと避難安全検証法という法律になっています。普段は排煙ダクトを小さくするために使っていますが、同じ計算方法を使って天井高から煙が顔の高さまで貯まる時間を丁寧に計算して、その分どれだけの量の木が燃えてもいいかを計算するとかなり多くの木を使えることが分かります。当社も含めて現代の建築家は大型建築では木材が使えないと思い込んでいて、偏見に満ちていたわけですが、法律を変えることなどなく、2000年に変更された建築基準法の今まで多くの木材を使うことが可能だと分かったのです。目からウロコでした。正確には法律に適合して火災時に上階に燃え移らないよう一部を不燃化していますが、9割近くは可燃物である木材です。

## 「構造材として使う」

ビル建築の構造で木材が最適なところを考えていで思いついたのが最上階です。ビルの最上階の屋根というのは上に機械させ載せなければ自分で自分の構造を支えていくだけです。それなら重いより軽い方がいいわけで、最上階は木造です。工事的に言えばコンクリートが最上階の下の床まで作られれば、施工床ができるわけで一層分のコンクリート作業をしないで済みます。しかも工期の短縮にもなるといいことづくめです。



3寸5分の角材を積み重ねただけのベンチ

# ミラノサローネでも注目、「突板の反撃」始まる 大阪で初の「アメリカ広葉樹突板懇談会」を開催

4月19日(火)「アメリカ広葉樹ツキ板懇談会」を大阪市内のホテルにて開催しました。突板のみに焦点をあてた懇談会の開催は今回が初めてでした。参加者は建築家、ゼネコン、住宅メーカー、木材・ツキ板業界の約50名の方々で、その中から9名の方にパネリストとして参加していただきました。



ダンサー・ベニア・アメリカスのブライアン・ゲルケン氏

趣旨説明後、アメリカ広葉樹輸出協会メンバーのダンサー・ベニア・アメリカスのブライアン・ゲルケン氏より「米国のアメリカ広葉樹ツキ板の現状と輸出」のテーマで、アメリカ広葉樹材突板の加工過程やスライス方法、また施工や市場での情報まで幅広くご説明いただきました。次いで「意匠素材としての広葉樹ツキ板、欧米と日本の違い」と題



イタリアのファッションブランド FENDI のブース

して前日にミラノサローネの視察から帰国されたばかりの安多化粧合板(株)の安多茂一氏から2016年のミラノサローネ国際家具見本市から見えてきた新しいベニヤのトレンドや意匠素材としてのベニヤの活用法などをご紹介いただきました。これまでデザインとは無縁の素材のような印象の強かつたベニヤですがお話を聞くとまさに「ベニヤの反撃」と言える内容でした。

安多氏は昨年頃からミラノサローネには大きな変化があるといいます。どうしたことかといふと、ここ数年は素材が非常に注目されており、本物の木、本物の石、本物の手触り、ラスティックであれば、ナチュラルであれば、自然のものであればいいというデザインが主流でしたが、そこからもう一度人の手によって何らかのデザインを作り上げなければならない、つまり「デザインへの回帰」と

いう流れが出てきました。そういった意識から大理石にしても単に並べるのではなく左右対象に柄を作って並べるように変わってきたのです。人間の手によってデザインされているものが美しい、そういう世の中になリつつあるというトレンドの象徴なのです。

アパレルメーカーの家具進出が増えていますが、フェンディ(イタリアの代表的なファッショングラン)でも高さ6mのアップルツリーをやはり左右対称にしてブックマッチで柄を作っていました。去年までは突き板を使ってもランダムに貼ることが多かったのですが、今年はこういったブックマッチでデザインをする、パターンを作るというケースが増えました。アメリカ広葉樹のウォルナットをランダムに貼るにしても色むらをつけたものをリズム良く並べる手法で一つのデザインを作り出していました。こういうデザインが欲しい、こういうデザインを作りたいという中で新しい突き板の貼り方が多く見られました。

今はやりのラスティック調にしても、節ありのホワイトオークであれば、今までイコールナチュラルな壁面である、素材感を大切



スイスの家具メーカー VITRA のブース

にしているというメッセージが込められていました。それが蝶番を入れたり、割れ目に黒い色を入れるなどナチュラル、ラスティック、自然素材というだけでなくワンステップ上げてデザインしたものにしようという試みが多く見られました。

違和感があるかもしれません、突き板の貼り方でも従来は木目が繋がるように貼っていたものを、ワンモジュール毎にリピートさせるなど、あえて自然である雰囲気を壊して人間がデザインをしたという試みが見られます。木の流れを自然に見せるのではなく人為的なデザインが突き板の世界にも入ってきたと言えます。また、Cグレードの素材を使って柄を作り出したりもしています。こうなると木材という意識ではなくて建築、家具用材の意匠素材として捉えようとしていると思います。ひとつの素材だけで作るので



イタリアの家具メーカー Poliform のブース

はなくそこにどういったデザイン、どういった意匠を付け加えるかをヨーロッパのハイエンドのメーカー・デザイナーたちは活発に始めました。

2016年の繊維業界のカラートレンドはアーストーンです。土の色、地球の色、砂の色、そういったアーストーンの中にアメジストやオパールといったストーンカラーが入ってきます。土系の色に宝石系の色が絡んでくるわけですが、実はこのカラートレンドに合うのがアメリカ広葉樹のウォルナットだけなのです。昨年まではサローネではもう少し色の浅い、肌色に近いヨーロピアンウォルナットが主流でしたが、このカラーチャートには合わないので、今年はサローネのどこへ行っても色の濃いアメリカ広葉樹のウォルナットが目につきました。

今年のサローネの各社のブースはバックパネルに突き板を使っているメーカーが増えました。家具やキッチンに関しても突き板がカムバックしてきているのが目立ちました。特にキッチンはびっくりするほど突き板が再来するなど久しぶりに世界中に突き板がカムバックしてきている印象でした。

突き板は、同じ場所でも並べ方を変えるだけで意匠が変わりますが、全く同じ木でも幅や使う位置を変えることによってユニークな柄の突き板ができる、それを使っていろいろなデザインができます。単調な針葉樹と違つてこういうことができるのが広葉樹です。



安多化粧合板(株)代表取締役 安多茂一氏

# アメリカ広葉樹バス見学会は富山・岐阜を訪問

## 高山家具の歴史と現況を知り、森の県らしい建築を見学



合掌造りの民家が建ち並ぶ集落を見下ろす場所での記念撮影

アメリカ広葉樹輸出協会（AHEC）では5月17日（火）～5月18日（水）に日本建築家協会（JIA）関東甲信越支部・住宅部会所属の11名の建築家とアメリカ大使館農務担当公使のデビッド・ミラー氏の参加により「アメリカ広葉樹バス見学会」を開催しました。今回の訪問先は日本で2番目の森林率を持ち、土地面積の82%が山村である岐阜県です。

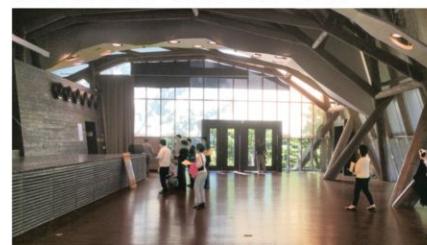
17日朝に富山駅で集合、五箇山と白川郷でユネスコの世界遺産でもある江戸時代初期の大型木造住宅である合掌造りの民家を見学。その後、日本有数の家具産地、岐阜県高山市の日進木工（株）の工場を訪ね、高山家具の伝統技術である「曲げ木」の製造工程を見学しました。そして（株）シラカワのショールームで「高山家具の歴史とアメリカ広葉樹のつながり」と題した勉強会を開催。

高山市副市長の挨拶後、センター長の野尻修二氏より高山の家具づくりの歴史や現状についてお話しいただきました。勉強会後のレセプションでは高山地域の木工関係者と参加建築家約30名が交流を深められました。

翌18日はまず飛騨産業（株）と（株）柏木工の工場を見学。次いで、高山市内で明治38年の火災後に再建された土間の吹き抜けの立体格子が見事な重要文化財の民家「吉島家住宅」を見学しました。その後、美濃市へ移動、森林や木材に関わる様々な分野で活躍する人材を育成することを目指して設立された専門学校「岐阜県立森林アカデミー」を見学。間伐を行わないと森林が荒れ、良質の木材が産出できないだけでなく、地球温暖化に対する森林の重要な役割である大気中のCO<sub>2</sub>の吸収能力が激減、さらに災害の



日進木工（株）の工場で「曲げ木」の製造工程を見学



岐阜県立森林文化アカデミーの森の体験ゾーンの大空間

原因になります。ここでは86,000本の間伐材を用い、面格子構造で耐震性能に優れた木質構造を実現しています。次に岐阜市で伊東豊雄氏設計の岐阜市立中央図書館を中心とする複合施設「みんなの森ぎふメディアコスモス」を視察しました。木造では世界初という南北約80m、東西約90mの規模の波打つようにうねった屋根が特徴的です。そして終着地、名古屋での解散となりました。協会ではこうした活動を通じ、日本の建築家やデザイナーにアメリカ広葉樹の良さを認識していただき、木材流通会社との橋渡しをすることでアメリカ広葉樹の需要拡大に努めています。

### 2017年アメリカ広葉樹建築家セミナーのご案内

日時 2017年6月28日（水）13:30～18:00

レセプション 18:00～19:30

会場 勝山館 宮城県仙台市青葉区上杉2-1-50

講師とテーマ

「そこでしかできない建築を考える」

飯田善彦 飯田善彦

「Honoring Materials（素材への畏敬）」

James Cutler, FAIA Cutler Andersen Architects

「米国広葉樹市場に基づく最新の広葉樹製材等級格付」

全米広葉樹製材協会主任等級検査官 Dana Spessert

「広葉樹の魅力を活かす塗料と塗装」

木材塗装研究会運営委員 長澤良一



飯田善彦（株）飯田善彦建築工房

京都府立新総合資料館 写真/鈴木研一写真事務所

James Cutler, FAIA Cutler Andersen Architects  
Newberg Residence, Oregon

「そこでしかできない建築」を設計テーマにする飯田善彦氏が設計と場所の関わりや設計手法を語り、2016年のAIA HOUSING AWARDを受賞のJames Cutler, FAIA氏が建築と素材の関係性や自作を語ります。さらにアメリカ広葉樹の等級格付方法や米国広葉樹業界の現状、広葉樹の塗装法や塗料についてなど盛りだくさんな内容です。多くのみなさまのご参加をお待ちしています。

### 「建築の可能性」

#### ホームページのご案内

[www.ahec-japan.org/](http://www.ahec-japan.org/)

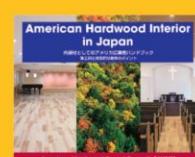
ホームページでは、アメリカ広葉樹輸出協会の活動状況、樹種に関する説明、その他アメリカ広葉樹についての最新の情報をご提供しています。



アメリカ広葉樹輸出協会 American Hardwood Export Council (AHEC)  
〒530-0047 大阪市北区西天満2-11-5 アメリカ総領事館内 Tel. 06-6315-5101 Fax. 06-6315-5103

#### パンフレットのご請求

アメリカ広葉樹に関する様々な情報満載のパンフレット、各種資料をご用意しています。左のホームページにてご請求ください。無料です。



左から、樹種解説、等級格付、内装材としてのアメリカ広葉樹ハンドブック。この他の資料についてはホームページでご確認ください。